

草あやめ

泉鏡花作

全一章

二丁目の我が借家の地主、《江戸兒》にて露地を  
鎖さず、裏町の木戸には無用の者入るべからずと式  
の如く記したれど、表門には扉さへなく、夜が更け  
ても通行勝手なり。但知己の人の通り抜け、世話に  
申す素通りの無用たること、我が思もかはらず、然  
りながらお附合五六軒、美人なきにしもあらずと雖  
も、濫に垣間見を許さず、軒に御神燈の影なく、奥  
に三味の音の聞ゆる類にあらざるを以て、頬被、懐  
手、湯上りの肩に置手拭などの如何はしき姿を認め  
ず、華主まはりの豆腐屋、八百屋、魚屋、油屋の出  
入するのみ。

朝まだきは納豆賣、近所の小學に通ふ幼きが、近  
路なれば五ツ六ツ袂を連ねて通る。お花やお花、撫  
子の花や矢車の花賣、月の朔日十五日には二人三人  
呼び以て行くなり。やがて足駄の齒入、鉄磨、紅梅

の井戸端に砥石を据ゑ、木槿の垣根に天秤を下ろす。  
目黒の筍賣、雨の日に蓑着て若柳の臺所を覗くも床  
しや。物干の竹二日月に光りて、蝙蝠のちらと見え  
たる夏もはじめつ方、一夕、出窓の外を美しき聲し  
て賣り行くものあり、苗や玉苗、胡瓜の苗や茄子の  
苗と、其の聲恰も大川の臙に流るゝ今戸あたりの二  
上りの調子に似たり。一寸苗屋さんと、窓から呼べ  
ば引返すを、小さき木戸を開けて庭に通せば、潜る  
時、笠を脱ぎ、若き男の目つき鋭からず、頬の圓き  
が莞爾々々して、へい／＼召しましと荷を下ろし、  
貝割葉の、蒼き鶏冠の、いづれも勢よきを、日に焼  
けたる手して一ツ一ツ取出すを、としより、弟、ま  
たお神樂座一座の太夫、姓は原口、名は秋さん、呼  
んで女形といふ容子の可いのと、皆縁側に出でゝ、  
見るもの一ツとして欲しからざるは無きを、初鰹は  
買はざれども、晝のお肴ながし、晩のお豆腐いく  
らと、先づ帳合を占めて、小遣の中より、大枚一歩  
が處、苗七八種をづばりと買ふ、尤も五坪には過ぎ  
ぎる庭なり。

隠元、藤豆、蓼、荔枝、唐辛、所帯の足と置りた

まひそ、苗賣なへうりの若衆わかいしう一々いち／＼名なに花はなを添そへていふにこそ、  
北海道ほっかいだうの花荔枝はなれひし、鷹たかの爪つめの唐辛たうがらし、千成せんなりの酸漿ほんじき、蔓つる  
なし隠元いんげん、よしあしの大蓼おほたて、手前てまい商あきなひまするものは、  
皆みな玉揃たまぞろひの唐黍たづもろこしと云々うんぬん。

朝顔あさがほの苗なへ、覆盆子いちごの苗なへ、花はなも實みもある中なかに、呼聲よびこゑ  
の仰々ぎやう／＼しきが二ツふたありけり、曰いはく牡丹咲ぼたんざきの蛇じゃの目菊めぎく、  
曰いはくシ、ヂンキウモン也なり。愚弟ぐていた直ちちに聞き惚とれて、  
賢兄にいさんお買かひな／＼と言いふ、こゝに牡丹咲ぼたんざきの蛇じゃの目菊めぎく  
なるものは所謂いはゆる蝦夷菊也えぞぎくなり。これは 九代だいいの後胤ごういん  
平ひらの、 と平家へいけの豪傑がうけつが名乗なれる如ごとく、のゝ字じふ  
二ツた附つけたるは、賣物うりものに花はなの他ほかならず。シ、ヂンキ  
ウモンに至いたりては、其その何等なんらの物ものなるやを知るべか  
らず、苗賣なへうりに聞きけば類たぐひなきしをらしき花はなぞといふ、  
蝦夷菊えぞぎくはおもしろし、其その花はなしをらしといふに似にず、  
嚴いかめしくシ、ヂンキウモンと呼よぶを嘲あざけるにあらねど、  
此この二種しゆ、一歩いふの外ほか、別べつに五錢せんなるを如何いかんせん。

然しかれども甚じんろくなるもの、豈あにそれほくどういっぺん  
可かならんや。即すなはち然さり氣けなく、諭さとして曰いわく、汝なな若輩ちやくはい、  
シシデンキウモンに私淑しゆくしたりや、金毛丸尾きんまうきうびぢやあ

るまいしと、二階に遁げ上らんとする袂を捕へて、  
可いぢやないかお買ひよ、一ツ咲いたつて花ぢやな  
いか。旦那だまされたと思し召してと、苗賣も勧め  
て止まず、僕が植ゑるからと女形も頻に口説く、皆  
キウモンの名に迷へる也。長歎して別に五百を奢る。

垣に朝顔、藤豆を植ゑ、蓼を海棠の下に、蝦夷菊  
唐黍を茶畑の前に、五本三本培ひつ。彼の名にしお  
ふシ、チンは庭の一段高き處、飛石の傍に植ゑたり。  
此處に豫め遊蝶花、長命菊、金盞花、縁日名代の豪  
のもの、白、紅、絞、濃紫、今を盛に咲競ふ、中  
にも白き花紫雲英、一株方五尺に蔓り、葉の大なる  
こと掌の如く、莖の長きこと五寸、臺を頂く日に二  
十を下らず、蓋し、春寒き朝、めづらしき早起の折  
から、女形とゝもに道芝の霜を分けてお濠の土手よ  
り得たるもの、根を掘らんとして、袂に火箸を忍ば  
せしを、羽織の袖の破目より、思がけず路に落して、  
大いに臺所道具に事缺きし、経営惨愴仇ならず、心  
なき草も、あはれとや繁りけん。シ、チンキウモン  
の苗なるもの、二日三日の中に、此の紫雲英の葉が  
くれに見えずなりぬ。

荔枝の小さきも活々して藤豆の如き早や蔓の端も  
見え初むるを、徒に名の大にして、其の實の小なる、  
葉の形さへ定ならず。二筋三筋すく／＼と延びたる  
は、荒れたる庭に縁り果つべくも覚えぬが、彼處  
に消えて此處に顯れけむ、其處に又彼處に、シ、ヂ  
ンに似たる雑草數ふるに盡きず、弟はもとより、は  
じめは殊に心を籠めて、水などやりたる秋さんさへ、  
いひ効なきに呆れ果て、罵倒すること斜ならず。  
草が蔓るは、又してもキウモンならんと、以來然も  
なくて唯呼聲のいかめしき渾名となりて、今日は御  
馳走があるよ、といふ時、弟も秋さんも、蔭で呟い  
て、シ、デンかとはかりなりけり。

日を経るまゝに何事も言はずなりし、不圖其のシ、  
デンの菜に晝食の後、庭を視むることありしに、雲  
の如き紫雲英に交りて小さき薄紫の花二ツ咲出でた  
り。立寄りて草を分けて見れば、形董よりは大なら  
ず、六辨にして、其の薄紫の花片に濃き紫の筋あり  
て蔬の色黄に、莖は絲より細く、葉は水仙に似て淺  
緑柔かく、手にせば消えなむばかりなり、苗なりし  
頃より見覚えつ紛ふべくもあらぬシ、デンなれば、

英雄人を欺むけども、苗賣我を愚になさず、と皆打  
寄りて、土ながら根を掘りて鉢に植ゑ、水やりて縁  
に差置き、とみかう見るうち、品も一段打上りて、  
縁日ものゝ比にあらず、夜露に濡れしが、翌日は花  
また二ツ咲きぬ、いづれも入相の頃しぼみて東雲に  
別なるが開く、三朝にして四日目の晝頃見れば花唯  
一ツのみ、葉もしをれ、根も乾きて、昨日には似ぬ  
風情、咲くべき蕾も探し當てず、然ればこそシ、デ  
ンなりけれ、申譯だけに咲いたわと、すげなくも謂  
ひけるよ。

翌朝、例の秋さん、二階へ駈上る跽音高く、朝寝  
の枕を叩きて、起きよ、心なき人、人心なく花却つ  
て情あり、昨、冷かにいひおとしめしを恥ぢたりけ  
ん、シ、デンの花、開くこと、今朝一時に十一と慌  
しく起出で、鉢を抱けば花菫野山に満ちたる装なり。  
見つゝ思はず悚然として、いしくも咲いたり、可愛  
き花、薊、鬼百合の猛くんば、我が言に憤りもせめ、  
姿形のしをらしさにつけ、汝優しき心より、百年の  
齢を捧げて、一朝の盛を見るならずや、いかばか  
り、我を怨みなんと、あはれさ言ふべくもあらず。

漱ぎ果てつ、書齋なる小机に据ゑて、人なき時、端然として、失言を謝す。然も夕にはしをれんもの、願くば、葉の命だに久しかれ、荒き風にも當つべきか。

なほ心安からず、みづから我が心なかりしを悔いたりしに、次の朝に至りて更に十三の花咲けり、嬉しさいふべからず、やや人々又シ、デンといふことなかれ、我が家のものいふ花ぞと、いとせめて愛であへりし、其の日日曜にて宙外君立寄らる。

卷苜の手を控へ掌に葉を撫して、何ぞ主人のむくつけき、何ぞ此の花のしをらしきと。主人大いに恐縮して假名の名を聞けば氏も知らずと言はる。忘れたり、斯道に曙山君ありけるを、花一ツ採りて懐にせんも惜く、よく色を見、葉を覚え、あくる日、四丁目の編輯局にて、しか／＼の草はと問へば、同氏頷きて、紙に圖して是ならん、それよ、草菖蒲。女扇の竹青きに紫の珠を鑲めたらん姿して、日に日に装増る、草菖蒲といふなりとぞ。よし何にてもあれ、我がいとほしのものかな。

【完】